

## ロバート・ハント著『ウィリアム・シェラベア：一つの伝記』\*

(マラヤ大学出版 1996年)

綱島 (三宅) 郁子\*\*

### 0. はじめに

ウィリアム・シェラベア (Rev. Dr. William Girdlestone Shellabear 1862-1947) といえ、日本のマレーシア研究において、『ハン・トゥア物語』『アブドゥラ物語』『ムラユ年代記』などの古典マレー文学研究者およびマレー語文法書や英馬辞書などの編纂者として広く知られている。しかし、江戸末期から昭和の第二次大戦終結後に相当するシェラベアの長い人生を決定づけたキリスト教信仰については、残念ながらこれまであまり知られていなかったように思われる。私は、マレーシアとのご縁ができた90年代前半から、いかなる動機でこれほどまでにシェラベアがマレー語文学研究にいそしんだのか、思想的背景を知りたいと願い続けてきた。その回答の一つとなったのが、本書である。

本書をマラヤ大学中央図書館の新書紹介コーナーで見かけたのは、1996年6月だった。手にとってまず驚いたのは、その頃の私がずっと気に懸け、リサーチが難航していたマレー語訳聖書についても具体的な記述が多く含まれていたことである。何よりも、シェラベアのマレー語文学研究の動機が、マレー人に対するキリスト教宣教に根差すものであったと大胆に書かれているのには仰天した。さらに、キリスト教の複雑な教会政治状況や宣教師間の確執、植民地支配者層との軋轢、マラ

ヤでの宣教戦略なども詳しく述べられている。なぜ、このような論考がマラヤ大学から出版可能となったのだろうか。

蛇足ながら、シェラベアと私の間接的な接点は、クアラルンプール市内のウェズレー・メソヂスト教会である。仕事でマレーシアに滞在していた間、私はしばしばこのお世話になったが、実はこの教会の敷地は、シェラベアが自腹を切って1897年に購入したものである<sup>1</sup>。この教会から、マレーシア社会の各方面で活躍する指導者達が輩出された。差し障りがあるので個人名は伏せるが、例えば今の与党の某大臣は、この教会の出身者である。そのことから、本書を紹介する意義は少なくないと思われる。

### 1. 著者ロバート・ハント氏の略歴およびマレーシアでの活動

著者のロバート・ハント氏 (Rev. Dr. Robert Anthony Hunt) とは、まだ面識はないものの、マレーシアのキリスト教史に関する文献を通して、本書と出会う前から名前を知っていた。個人的に直接連絡がとれたのは、今年

---

\* Robert Hunt. *William Shellabear: A Biography*. University of Malaya Press. 1996. RM40.

\*\* マラヤ大学言語学部博士課程

<sup>1</sup> 所在地 2, Jalan Wesley, 50150 Kuala Lumpur. ただし、教会設立に当たったのは Dr.W.T. Kensett 夫妻で、英語のみを使用する教会として発展した。

の10月下旬のことである。日本語による本書の紹介については、即座に快諾してくださり、私なりの観点から自由にコメントをつけてよい、とのことだった。

1990年から92年にかけて、クアラルンプール市のトゥアंक・アブドゥル・ラーマン通りにあるプルタマ・コンプレックスでマレー語会話を習った経験が、後で判明した私達二人の共通項である。当時、マレー人の先生から「アメリカ人男性がここに来て、聖書をマレー語で読む勉強をしていますよ」と聞いたことが記憶に残っていたので、その旨確認したところ、「他にも同様のアメリカ人がいたかもしれないから同一人物かどうかは言えないが、確かに私はそこでマレー語を学び、マレー語訳聖書を読んでいた」とのことだった<sup>2</sup>。世界は狭いものだと感じた次第である。

略歴は次の通りである。1955年、アメリカのテキサス州ダラスで、両親や親族が皆教育関係者という教師家系に生まれたハント氏は、理系から転じてオースティンのテキサス大学で歴史学を専攻した。続いて、南メソヂスト大学パーキンス神学部修士課程で神学を専攻し、同時にオースティンの合同メソヂスト教会で副牧師を務めた。その間、ハント氏と同じ二つの大学で音楽を専攻したサラワク州シブ出身の福州華人女性と結婚、それが機縁で1985年にクアラルンプールへ来た。マラヤ大学歴史学部博士課程に在籍する傍ら、当時プタリン・ジャヤの聖フランシスコ・ザビエル教会の敷地内にあったマレーシア神学

院<sup>3</sup>で教鞭をとり、神学などを教えた。その他に、1992年までのマレーシア滞在中、改訂版マレー語訳聖書（1996年発行）<sup>4</sup>の編集やマレーシアのキリスト教史について執筆活動をした。サバティカル休暇でいったんニューヨークに戻った後、1994年から97年までシンガポールのトリニティ神学校で教育に従事し、東南アジアのイスラームやムスリム・クリスチャン関係の研究にも関わった。1995年には、本書の元となった博士論文によってマラヤ大学から博士号を授与された。1997年以降、オーストリアのウィーンで、英語を使用する合同メソヂスト教会を牧会しながら、アメリカ系のウェブスター大学で、主にセム系三宗教（ユダヤ教・キリスト教・イスラーム）間の対話に関する講義を担当している。

## 2. 本書の特徴

上述の略歴から想像されるように、本書では、俗にバイブルベルトと呼ばれるアメリカ南部出身の合同メソヂスト派牧師という著者の立場から、同じ英語圏出身のメソヂスト派先輩牧師シェラベアの英国植民地マラヤ

---

<sup>3</sup> Seminari Theoloji Malaysia. 1979年1月6日、ブリックフィールドに設立された。現在はセレンバンにキャンパスがある。エキュメニカルではあるが、中枢はメソヂスト、ルーテル、アングリカンとなっている。

<sup>4</sup> この聖書は、特定のキリスト教専門店あるいはマレーシア聖書協会でのみ販売されているが、購入できるのはキリスト教関係者に限られ、一般配布や閲覧はできない。なお、1994年頃、ある日本人男子留学生が、自分はクリスチャンだからこの聖書を手に入りたいとマレーシア聖書協会に申し出たところ、パスポート提示を求められ、幾つかの宣誓書類に署名をさせられたと聞いた（1999年8月4日 本人との会話より）。

---

<sup>2</sup> 2001年11月3日付 筆者宛私信による。

での活動が全面的に擁護されている。その執筆目的は、前途有望な安定した職を投げ打ってまで生涯研究に没頭したマレー語文学に対するシェラベアの情熱が、実は「ほとんど見捨てられたままの」マレー人への「愛」に基づくキリスト教宣教を意識したものであったことを肯定的に立証することである。従って、キリスト教の護教的要素が強く前面に出ており、マレーシアのキリスト教関係者のみならず、マレー人をも読者層に想定して、クリスチャンの置かれた歴史的状況を理解するよう促す企図があるように見受けられる。

私が懸念するのは、恐らくは善意からであろうハント氏のこの意図が、現在のマレー・ムスリム側にストレートに伝わっているかどうかという点である。シェラベアは他の植民地支配者層とは異なり、直接の交流を通してマレー人を「愛した」。そして、マレー語やマレー文学に「魅了された」。だからこそ、マレー人をキリスト教の改宗へと導き、移民系中心の英語使用教会ではなく、土地の子マレー人を主体とするマレー語使用教会を設立しようと志した。その決意のもとに、まずマレー語文学を研究してマレー人の心性を理解しようとした。そこから派生して、英語教育ではなく母語であるマレー語教育をマラヤの教育政策の中心軸に据えるべきだと、シェラベアは頑強に主張したのだ。本書を貫くこの論理は、英国植民地支配者側に立つ宣教師であったシェラベアおよびアメリカ出身の牧師である著者にとっては、至極当然のことかもしれない。しかし、イスラーム信仰に心から満足し、イスラームをアイデンティティの拠り所

とすることに些かの疑いも持たないタイプのマレー・ムスリムにとっては、マレー人コミュニティに対する文化侵略あるいは余計な干渉行為と受け取られかねないのではないだろうか。事実、イスラーム伝道を主眼とするウェブサイト上では、匿名ムスリムからのマレー（シア）語によるシェラベア批判が暗に展開されてもいる<sup>5</sup>。さらに、7年間のマレーシア滞在の後、マレーシア人の配偶者を持つにも関わらず、ハント氏はマレーシアでの就労許可を取得できなかった。シンガポールを経由して現在ウィーンに滞在している事情は、恐らくこのことと無縁ではないだろう。

計 11 の章立てで 373 ページに及ぶ本書は、1 で述べたように、1994 年にマラヤ大学歴史学部提出された博士論文を元にしたものである。テーマ発案のきっかけは、今は退職されたマラヤ大学歴史学部の Dr. Lee Kam Hing 教授が、1980 年代半ば頃からマレーシアの教会史に関する一連のセミナーを企画し、ハント氏もメソヂストの歴史などを担当したことによる。その頃、MBRAS<sup>6</sup> 会員でもあったハント氏は、マレー語文学に関心を持つ歴史学者達と出会った。この二つの要因が、シェラベアとハント氏の邂逅となり、リサーチが始まった。そのうちに、歴史学部で発表する機会があり、その後、学部長からシェラベアをテーマに博士論文を書かないかという

<sup>5</sup> サイト名 ‘Dakwah e Group of Malaysia’.

<sup>6</sup> The Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society. ハント氏は、89 年と 93 年にここの学会誌に論文を 2 本掲載している。

話が持ち込まれたという<sup>7</sup>。

ハント氏によれば、「マラヤ大学での仕事は全体的に楽しかった。ムスリムが主流を占める歴史学部では、20世紀初頭のマレー人に対するキリスト教宣教をテーマにすることは、非常にオープンであった。要するに、ムスリムの関心事は、きちんとした調査にのっとった論文かどうかということだけだったのだ。論文を本にして出版したのは、指導教官の一人 Dr. Lee Kam Hing 教授の勧めによるものだ。私の唯一の不満は、出来上がった本が、学術的なものというよりも物語本のような体裁になっていて、レイアウトや写真の挿入にも馬鹿げたミスが散見される、という点にある。しかしながら、マレー人がこのテーマについて開かれた態度をとっていたことは事実である」<sup>8</sup>という。さらに、もう一人の指導教官 Dato' Dr. Mohammed Yusoff 教授の反応について質問すると、「教授や他のムスリム研究スタッフがまず関心を持ったのは、シェラベアが果たしたマレー語文学出版の役割であった。口頭試問の際には、私の論文の後半部分については、ほとんど何も聞かれなかった。ただ、R.O.Winstedt や R.J.Wilkinson とシェラベアとの関係については尋ねられた。私に言えることは、あの頃は、ムスリム研究者達は、公平でオープンなマレーシア史に関心があったのだということだ。当時は、キリスト教宣教に対して、それほど緊張がひどくはなかった」<sup>9</sup>という返事がかえってきた。

<sup>7</sup> 2001年10月30日付 筆者宛私信による。

<sup>8</sup> 2001年10月30日付の筆者宛私信による。

<sup>9</sup> 2001年11月3日付の筆者宛私信による。

マラヤ大学からの本書の出版が可能になった背景について、ハント氏が語り得ない3つの理由が考えられると思う。まず、本書では、マレー人氣質の善良さやマレー語文学が持つ魅力をアピールし、賛美していることが挙げられる。次に、多分クリスチャンであろう Dr. Lee Kam Hing 教授が、マレーシアのキリスト教関係者のいわば代弁役であるハント氏を全面的にバックアップしたことは充分想像できる。さらに、ムスリム側から見れば、本書をイスラーム伝道に逆利用する可能性がある。キリスト教宣教のやり方からヒントを得て、イスラームのダッワ運動に応用する方法は、最近マレーシアで顕著だからである。

### 3. 本書に描かれたシェラベア像

一次資料として、ハント氏は、マレー語文学に関するシェラベアの論考、キリスト教関連の論文、おびただしい往復書簡、メソヂストの教会議事録、晩年の手記であるシェラベアの自伝、次女の回想録などを用いながら、年代毎に区切って一生を描いている。

本書に描かれたシェラベア像で、注目すべき点を以下に列挙する。

- (1) 英国国教会（アングリカン）系の中上流家庭で生まれ育ったが、両親の反対を押し切って、聖職位や儀式にとらわれない低教会であるメソヂストに改宗した。この点に関する生家との和解は、終生成立しなかった。
- (2) パブリックスクールでも学業優秀だったが、父親の意向で、英国陸軍工兵隊長としてシンガポールに派遣され、マレー人兵士

を統率する任務に就いた。次第に戦争倫理について疑念が芽生え、「一日に 10 時間も人命破壊の準備に費やす生活よりも、一日中神に直接仕える人生の方がすばらしいではないか」<sup>10</sup>という理由で、宣教師に転向した。

- (3) 英国出身者でありながら、幼少時代の孤独な経験から階級制度を嫌い、アメリカ宣教団の「平等主義的」やり方にひかれていった。人生後半期にはアメリカの神学校でマラヤ向け宣教師の養成にあたり、最終的にはコネティカット州で波乱に満ちた一生を終えた。
- (4) 生涯キリスト教信仰を堅持しつつも、マレー人に対する文書伝道を実践するうちに、イスラームに対する態度や見解に徐々に変化が現われ、晩年にはクルアーンのマレー語訳まで試みるに至った。それは、まずマラヤのクリスチャン達が隣人であるマレー・ムスリムの信仰を知るようになるため、そして、マレー・ムスリムに対しては、自分達が何を信じているのかをアラビア語ではなく自分達のことばで知ってほしいと願ったためである。その準備段階として、アラビア語とイスラームを勉強しに、オランダのライデンやエジプトのカイロにも赴いた。この点において、当時のキリスト教宣教師としては、パイオニア的存在である。
- (5) プライベートな面では、初婚、再婚ともに妻を病気で亡くしたため、三度結婚したが、

異なる母を持つ三人の子ども達との別居生活もかなり長かった。さらに、金銭的見返りの少ない仕事のため、たえず経済的不安定に悩まされたり、しばしば病に倒れたりもした。

その他、サマーセット・モームの植民地小説を彷彿とさせるような南洋の在外西洋人社会の享乐的な一面に対し、敢然とモラル是正の論陣を張ったこと、キリスト教各教派および英国・オランダ・アメリカの各聖書協会の協力あるいは競合関係、さらに宣教師グループ内部の人間関係の抗争または対立なども描かれていて、興味深い。

シェラベアの活動の場は主にシンガポールとマラッカであったが、ババ・ニョニヤ、インド系、中国系、ユーラジアン系の教会はその後発展を見たにも関わらず、シェラベアの悲願だったマレー語を使用するマレー人教会は、結局のところ、実現しなかった。最初の妻との間に生まれた一人息子を医者にし、父子二代でマラヤでのマレー人伝道を開拓しようという夢も、息子の独立に伴い、はかなく消えていった。二番目の妻が生んだ二人の娘は、それぞれマラヤの地で配偶者を得て、父の後を継いだ。が、戦争やマラヤ独立などの状況変化によって、やむなく引き上げざるを得なかった。

このように、精力的なシェラベアの開拓伝道は、対人的側面では目立った成果を上げることはなかった。しかしながら、文書活動においては現在でも高い資料価値を有する文献を数多く残した。そのような見地において、シェラベアの宣教精神は敗北に終わったとは

---

<sup>10</sup> 本書 p.51。

必ずしも言えないのである。

問題点としては、マレー人伝道とパンコール条約との関係が不明瞭なままであること、シェラベアは福建語の読み書きも習得してキリスト教文書を作成したというが、その証拠が提示されていないこと、自伝や娘の回想録などの資料には自己正当化の可能性はないのかということなどが挙げられる。さらに、シェラベアの人生を、著者が歩みつつある足跡にどこかなぞらえて解釈してはいないだろうか、そんな印象すらある。しかしそれは、シェラベアに限らず、一人の人物を描き切ることの限界を示すものでもあろう。

#### 4. 今後の展望

本書に対する反応について述べる。1999年6月に、再びマラヤ大学中央図書館開架棚で本書を数冊見かけたが、どれも書き込みが入っていて、複数の学生あるいは教員によって、相当読まれたことがうかがえた。また、華人メソヂストの知人達は、当然のことながら、本書の存在を知っていた。

本書は、一人の奇特定の宣教師の卓越した軌跡のみならず、数多くの重要なテーマをも含む作品である。例えば、「マレーシア」という呼称が、メソヂスト宣教師によって既に1890年代から使われていたということは、本書によって私は初めて知った<sup>11</sup>。メソヂスト宣教師にとって「マレーシア」の地理的範囲は、マラヤ、海峡植民地（ペナン、シンガポール）、サラワク、スマトラ、ジャワを意味

していた<sup>12</sup>。すなわち、現在のマレー半島とインドネシア諸島が「マレーシア」に考えられていたというのである。また、2000年12月のJAMS総会と2002年2月開催予定のJAMS総会での私の報告テーマである州法におけるマレー（シア）語の禁止用語リスト制定の遠因は、そもそもシェラベアが翻訳したマレー語聖書の語法がかなり関係していることも本書によって判明した。

今後は、シェラベアがもたらしたマレー語とキリスト教の関係における正と負の遺産について、さらに考察を発展させ、別稿を作成していく所存である。

(2001年12月27日記)

#### [追記]

植民地支配下でのキリスト教宣教は欧米列強の文化帝国主義であるという批判が、ムスリム側と日本側にはある。しかし、少なくとも日本側に限るならば、大東亜共栄圏構想の下で、日本軍がマラヤのキリスト教会を次々に破壊し、神父、牧師、宣教師をシンガポールのチャンギ刑務所などに投獄して拷問を加えたという史実の前に、そのような批判は説得力を失う。マレーシアの主流キリスト教会のどこでもこの悲劇が語り草になって現在に至っていることは、決して看過されるべきではない。

<sup>11</sup> 本書 p.x.

<sup>12</sup> サバについては触れられていない。